

「畑がやりたい」
～意欲と行動の改善を促す意味のある作業を活用した作業療法の実践～

館 なつみ

【keyword】園芸、意欲

【はじめに】

今回、偽痛風により意欲、ADL が低下した症例を担当した。〈意欲と行動の改善を促す〉には意味のある作業への従事が報告されている。対象者にとって意味のある作業への従事により ADL が改善した実践内容を報告する。尚、発表に際し、本人、ご家族、当院倫理委員会より同意を得た。

【症例紹介】

80 歳代女性。診断名は偽痛風。自宅にて転倒し、左股関節痛出現。CT 上明らかな骨折所見ないが日常生活動作の低下がみられた。病前は園芸を行っていた。HOPE：家に帰りたい、畑がやりたい。

【初期評価】

初回介入時には「何もできなくなっちゃって」と消極的な発言が多くみられた。声掛けに対しても反応が乏しい状態であった。しかし、園芸について話をすると表情が明るくなり、自ら話を始める様子もみられた。機能的自立度評価法（以下 FIM）：39/126 点。Numerical Rating Scale（以下 NRS）：左下肢、7/10。Vitality index（以下 VI）：4/10。移乗：軽介助だが疼痛あり。歩行：疼痛により困難。トイレ動作：おむつ全介助。介入開始時には多くの時間をベッド上で過ごし、食事も自室で摂っていた。

【経過】

動機付けとして病前に行っていた園芸の話をした。実際に対象者が行っている手順に沿い、畑に近い環境で園芸を行うことにした。1 週目には野菜の選定、園芸用ラベルの作成と車椅子座位で可能な作業を行った。2・3 週目には草抜き、種まき、水やりと歩行動作を取り入れ、徐々に活動レベルが上がった。5 週目には肥料の袋を持って撒く、しゃがんで間引きをするなど応用的な動作が可能となった。園芸ができたことで意欲が向上し、身体機能が回復した。そして、ADL の改善に繋がった。

【最終評価】

10m歩行：シルバーカー使用し 17 秒 83、42 歩。FIM：96/126 点。NRS：左大腿外側部、3/10。VI：9/10。移乗：自立。歩行：シルバーカー使用し見守り（近位監視）。トイレ動作：ポータブルトイレ自立。食事の際には、看護師が見守り、シルバーカー歩行にてデイルームまで移動していた。他の患者さん、スタッフに自ら話しかける様子もみられた。

【考察】

対象者が改善した理由は園芸を行ったことだと考える。ただ園芸を行っただけでなく、意欲と身体機能の経過により園芸の難易度を設定したことが重要だと考える。初期は意欲を高めるための工程にし、後期には高い身体活動が必要な工程へと変更した。対象者にとって園芸は意味のある作業で、園芸の工程が進んでいくほど ADL が改善した経験は小檜山らも報告している。意味のある作業での成功体験は能動的な行動を産出する契機となり、心身機能・構造やセルフケアといった他の活動が向上したという事例報告を支持している。また、主体的な生活を送っていくためには対象者にとって意味のある作業の従事を支援する重要性は先行文献で示されている。今回の経験から精神的な改善に加え、身体機能面の改善を目的とする場合でも意味のある作業への従事を今後も支援していきたい。